「連体詞リスト」について

茂　木　俊　伸

1．はじめに

学校文法で品詞の一つとして立てられている「連体詞」は，その認定の基準も所属する語も一定せず，「いわば単語のはきだめ」（井手1965：291）とも評される語類である[1]。このため，この品詞を捉えるための一つの手がかりとして，辞書（国語辞典）においてどのような語が連体詞とされているのかについて，これまで何度も日本語研究者による調査が行われてきた。

その結果を見るかぎり，辞書における実態としては，「昨–」「翌–」のような形態素から「ありとあらゆる」のような句まで，さまざまな単位の表現が「連体詞」として認定されている。また，これらの調査はそれに先行する調査を必ずしも参照していないため，その成果が十分に活かされてきたとは言いがたい。

そこで筆者は，先行調査によって連体詞とされている語群を一覧化した「連体詞リスト」を作成し，2020年３月にウェブ上で公開した[2]。本稿では，まず，この「連体詞リスト」の添付文書を再構成し，同リストの概略を紹介する（第２節）。続いて，現行の中学校国語教科書に示されている連体詞の語例とリストとを照合し，文法教育におけるこの品詞の扱われ方を確認する（第３節）。

2．「連体詞リスト」の概略

「連体詞リスト」は，連体詞ならびに連体詞的用法を持つとされる語（もしくは表現）について，辞書を用いた先行調査（５種）の結果を統合し，計347語を一覧化したものである。

リストの本体は，カンマ区切りのShift_JISテキストファイル（CSV形式）であり，その概略を示したPDF形式の添付文書（readmeファイル）も併せてダウンロードできる。

---

[1]「連体詞」に関する学説史的な観点からの整理ならびに品詞認定上の問題については，井上（1958），島田（1964），井手（1965），岡村（1967），小松（1973），金（2005），松原（2009），刀田（2016）などを参照。

[2]「連体詞リスト」は，科学技術振興機構による研究者データベース「researchmap」上で公開している（https://researchmap.jp/mogitoshinobu/published_works）。

2.1　リストの項目

本リストを構成する項目は，「No.」（１から347までの通し番号），「連体詞」（見出し語），「漢字表記」，そして５編の先行調査（新しい方から順に，刀田2013，田村2008，鈴木英夫1984，甲斐1980，鈴木一彦1973）における当該語の掲載状況を示す欄である。

通し番号を除く各項目の概要は，次のとおりである。

2.1.1　連体詞

この欄は，見出し語に相当する。当該の語の連体修飾の形を，現代仮名遣いのひらがなで示した。この欄に記載した語形は，先行調査が調査対象とした辞書の見出し語と一致しない場合がある（例：本リスト「くだんの」／辞書「くだん」）。

また，辞書によって収録対象が現代語のみか古語まで含むかが異なるが，本リストでは現代語と古語の区別をしていない。辞書の親見出しと子見出しの区別もしていない。

2.1.2　漢字表記

連体詞には，「あたら」（惜／可惜）・「あったら」（惜／可惜）のように異形態を持つものもある。辞書を参考にしつつ，漢字表記のある語には，語の同定の参考となると思われる表記を示した。

2.1.3　先行調査の掲載状況

先行調査である刀田（2013），田村（2008），鈴木英夫（1984），甲斐（1980），鈴木一彦（1973）それぞれについて，各語の掲載状況を「０」から「３」までの数字で示した。それぞれの数字の意味は，次のとおりである。

a）先行調査において，連体詞と連体詞的用法を持つ語とを区別して認定している場合，基本的に，連体詞には「１」，連体詞的とされる語，連体詞説への言及がある語には「２」を記入した。
b）両者の区別に言及がない場合は，すべての語に「１」を記入した。
c）当該の調査に記載がない語には「０」を記入した。
d）本リスト作成時の確認調査（後述）により追加した語には「３」を記入した。

2.2　収録した先行調査

本リストは，辞書における連体詞の収録状況を調査した５種の先行調査の結果の情報を統合したものである。

これらのうち，最も語数の多い刀田（2013）の結果については，調査対象の辞書との照合を行い，一部修正を行った。また，鈴木英夫（1984）の結果についても，一部の語について辞書との照合を行った。この結果，これらの調査に関しては，2.1.3節に示したとおり，掲載状況に「３」を記入した語が生じた。これら以外の調査に関しては，辞書における掲載の有無・正誤の網羅的な確認は行っていない。

それぞれの先行調査で対象とされている辞書（各調査における掲載順），調査の概要，ならびに本リストのデータ化にあたっての作業内容は，以下のとおりである。

2.2.1　刀田（2013）

『日本国語大辞典（JapanKnowledge版）』を調査対象とし，「連体詞と認定されているもの，また連体詞のように用いると記述される語」（同:23）として，計222例が得られたとしている。ここで『日本国語大辞典（JapanKnowledge版）』とされているのは，『日本国語大辞典（第２版）』の電子版である。

これに対し，本リストでは，刀田（2013）の掲載語を『日本国語大辞典（第２版）』で確認し，品詞欄が連体詞となっている語には「１」，それ以外に連体詞もしくは連体詞的とする記述がある語には「２」を記入した。さらに，刀田（2013）で「方言資料で見られる語」（同:23）として示されている語には「1d」「2d」のように「d」を加えた。

なお，刀田（2013）に記載の語のうち，「すっとんだ」（同:25）は語形を「すとんだ」に修正した。また，「あらえし」「あらえむ」「ここなる」（同）の３語は『日本国語大辞典（第２版）』に連体詞と認める記述がなかったため，削除した。

逆に，『日本国語大辞典（第２版）』で連体詞（的）とされる一方で，刀田（2013）には記載がない「あがいな」「ありとある」「いろせな」「おっきな」「ちっちゃな」「わ」の計６語を，本リストに追加した。これらの語には追加修正を表す「３」を記入し，上記の「１」「２」と区別できるようにした。

2.2.2　田村（2008）

次の５種の「常用辞書」を対象とした調査である。

『新明解国語辞典（第６版）』（2005），『旺文社国語辞典（第10版）』（2005），『岩波国語辞典（第４版）』（1986），『福武国語辞典（初版）』（1989），『明鏡国語辞典（初版）』（2002）

手順として，⑴『新明解国語辞典（第６版）』と『旺文社国語辞典（第10版）』から「連体詞」「連体詞的」という記載のある語を抽出，⑵残りの３種の辞書の記述を調査，という形で調査しており，この手順で得られた連体詞ならびに連体詞的とされる計

143語を示している。

これに対して，本リストでは，少なくとも１種の辞書に「連体詞」の認定があるとされる語には「１」，同じく「連体詞的」とされている語には「２」を記入した。

2.2.3　鈴木英夫（1984）

次の８種の辞書を対象とした調査である。

『岩波国語辞典（第３版）』，『学研国語大辞典』，『広辞苑（第３版）』，『三省堂国語辞典』，『新潮国語辞典（改訂版）』，『新明解国語辞典（第３版）』，『日本国語大辞典』，『例解国語辞典』

上記８種の辞書の連体詞の認定状況を調査し，８種すべてに掲載されている語から４種掲載の語までの４段階に分けて，計40語の「共通度の高い連体詞」（同:77）が示されている。

これに対して本リストでは，記載されている語すべてに「１」を記入した。ただし，鈴木英夫（1984）で「さる」として挙げられている語は，「然る／去る」どちらの表記なのか明示されていないため，両者に「１」を記入した。

また，本リストの作成作業中，鈴木英夫（1984）のデータをまとめる過程で，示されている40語以外にも，ここに掲載されていてもおかしくない，複数の調査対象辞書で連体詞とされている語が見られた。このため，入手・閲覧不可能であった『三省堂国語辞典』と『例解国語辞典』を除く６種の辞書を使った確認調査を行った。

この確認調査の対象としたのは，本稿（2.2節）の５種の先行調査のうち鈴木英夫（1984）のみが認定なしとする語（13語），鈴木英夫（1984）と鈴木一彦（1973）のみが認定なしとする語（８語），「ああいう」「こういう」「そんな」「どんな」の計25語である。

この結果，少なくとも４種以上の辞書に記載のある次の12語については，本来，鈴木英夫（1984）において上述の40語に加えて挙げられているべきであった語と考え，追加修正を表す「３」を記入した。

「あらぬ（有らぬ）」「いな（異な）」「くしき（奇しき）」「こん（此ん）」「さんぬる（去んぬる）」「しゅたる（主たる）」「そんな」「たんなる（単なる）」「ちいさな（小さな）」「どんな」「なんたる（何たる）」「むりからぬ（無理からぬ）」

なお，この確認調査の具体的な手順と結果は，本リストの添付文書に示している。

2.2.4　甲斐（1980）

次の８種の辞書を対象とした調査である。

『広辞苑（第２版）』,『新明解国語辞典（第２版）』,『角川国語辞典（新版）』,『岩波国語辞典（第２版）』,『学研国語大辞典』,『日本国語大辞典』,『新潮国語辞典（改訂版）』,『講談社国語辞典（文庫版）』

手順として，⑴文法書・講座類などに連体詞として掲げられた語，⑵『広辞苑（第２版）』の連体詞，⑶「辞書に登録された連体詞」（鈴木一彦1973）について，残りの７種の辞書で掲載の有無を調査しており，「国語辞書に登録された連体詞一覧」計156語が示されている。

本リストでは，甲斐（1980）に記載されている語すべてに「１」を記入した。

2.2.5　鈴木一彦（1973）

次の２種の辞書（いずれも版は不明）を対象とした調査であり，その掲載状況を「辞書に登録された連体詞」として示したものである。

『明解国語辞典』（1971），『角川国語辞典』（1964）

「辞書に登録された連体詞」は計108語あり，本リストでは，ここに記載されている語すべてに「１」を記入した。ただし，鈴木一彦（1973）で「ありとあ（らゆ）る」として挙げられている語は，「ありとある」「ありとあらゆる」に分け，両語に「１」を記入した。

なお，鈴木一彦（1973）には「主要文法書における連体詞」の一覧も挙げられているが，これは本リストに反映させていない。

2.2.6　まとめ

以上の手順で作成した「連体詞リスト」では，国語辞典で連体詞あるいはそれに類するものとされたことのある語（表現）について，先行調査において連体詞と認められている語（「１」），連体詞的とされている語（「２」），先行調査の基準に該当するはずが見落とされていた語（「３」）を区別して示しており，さらにそれぞれの調査の未掲載語（「０」），ならびに方言と考えうる語（「1d」「2d」）を確認できる。

連体詞は一般的に，「数が少ない」（小松1973:52），「一品詞としては数量的な劣勢にある」（金2005:68）というように，所属語の少なさが指摘される。本リストは，具体的な数字として，過去の調査で得られた連体詞が計347語あることを示した。

本リストは，実態の分かりにくい「連体詞」について，品詞情報を扱う必要がある日本語文法研究，あるいは文法教育，辞書編集，自然言語処理等の関連諸分野において，その位置付けや扱い方の再検討を行う材料を提供するものと位置付けられる。

3．中学校国語教科書における連体詞

最後に，「連体詞リスト」の情報はどのように活用できるのか，上で触れた文法教育との関わりから考えてみたい。

本リストからも明らかなように，連体詞は，その認定のあり方に幅がある。例えば，347語のうち，先行調査すべてで連体詞（的）と認められている語は36語（2.2.3節で追加した語を加えると44語）に過ぎない。これらはいわば，連体詞の中核となる語群だと考えられる。

では，中学校国語教科書の品詞分類において，連体詞の例として挙げられている語は，これらとどれくらい一致するだろうか。現行の教科書（令和２（2020）年検定，令和３（2021）年発行）における１年生から３年生までの品詞分類に関するコラム，文法解説等を調査し，連体詞の具体例として挙げられている語をまとめたものが，次ページの《表》である。

《表》では，各社の欄にそれぞれの語が挙げられている場合は「○」を記入し，「連体詞リスト」の欄には５種の先行調査で「１」もしくは「２」となっている数を示した。ここから，中学校国語教科書に示されている連体詞は，最も多い教科書では18語，最も少ない教科書では６語であることが分かる。

なお，教育出版の「いろんな」の「#」は，令和３年度用教科書では「いろいろな」が挙げられており，同年７月に「いろんな」への訂正が出ているものである[3]。また，「どの」の「△」は，「指示語（こそあど言葉）」の表で「その」以外の「-の」系の表現を埋める問題に現れていることを指す。

[3] 教育出版ウェブサイトの「訂正情報」（https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/chuu/kokugo/correction/）による（2023年１月31日最終確認）。

《表》現行中学校国語教科書における連体詞の語例

	教育出版	三省堂	東京書籍	光村図書	連体詞リスト
あの	○		○	○	5
あらぬ				○	3
あらゆる	○	○	○	○	5
ある		○	○	○	5
あんな			○		4
いかなる			○	○	5
いろんな	#		○	○	5
いわゆる	○				5
大きな	○	○	○	○	5
おかしな			○	○	5
この	○	○	○	○	5
こんな			○		3
その	○	○	○	○	5
そんな			○		2
たいした		○	○	○	5
大それた	○				5
小さな			○	○	4
どの	△		○	○	5
とんだ			○	○	5
どんな			○		3
わが	○		○	○	5
掲載語数：	10	6	18	15	

《表》に示したように，現行中学校国語教科書すべてで具体例として取り上げられており，かつ「連体詞リスト」の先行調査５種でも連体詞とされているのは，「-の」系の指示語のうちの「この」「その」，「あらゆる」，「大きな」の計４語である。

一方，国語教科書であまり取り上げられておらず，連体詞リストでも比較的掲載が少ない例として，「あらぬ」や「こんな」「そんな」「どんな」が挙げられる。

まず，「あらぬ」に関しては，鈴木英夫（1984）で見落とされた可能性があり（本リストでは「３」とした），これを含めると連体詞として認められにくい語ではない。この語が教科書で語例として採用されにくいのは，形態的な理由が考えられる。

例えば，東京書籍『新しい国語１』の文法解説では，連体詞12語を「「～の」型」，「「～な」型」，「「～た（だ）」型」」，「「～る」型」の４類に分類したうえで示している（同:264）。言うまでもなく，この分類は「これら以外の形態の語は連体詞ではない」ことを示すわけではなく，語数が比較的まとまって存在する形態を例示したものと考

えられる。「連体詞リスト」における語末が「ぬ」の語として，例えば「言い知れぬ」「要らぬ」「思わぬ」「素知らぬ」「無理からぬ」などを挙げることができるのであるが，上の４類に比べて相対的に語数が少なく，また中学生が理解すべき表現としては扱いにくいと判断された可能性が考えられる。

「あんな」「こんな」のような「-んな」系の指示語は，１社のみで連体詞の語例として挙げられている。先の「-の」系の指示語と異なり，必ずしも「連体詞リスト」の先行調査で安定して連体詞とされているわけではないことが分かる。

実際，現在市販されている中高生向けの国語辞典の記述を確認すると，その品詞は辞書によって割れており，異説を併記する形で示されている場合もある。次に，中学生向けの辞書４種で示されている「あんな」の品詞情報を示す。

⑴ **「あんな」を連体詞とする辞書：**

『例解新国語辞典（第10版）』（※「形容動詞とする考え方もある」とする）

『ベネッセ新修国語辞典（第２版）』

⑵ **「あんな」を形容動詞とする辞書：**

『旺文社標準国語辞典（第８版）』

『学研現代標準国語辞典（改訂第４版）』（※「連体詞とする考えもある」とする）

中学校国語教科書で「あんな」類が扱われにくいのは，このような品詞の扱いの「ゆれ」を反映したものと考えられる[4]。

なお，「あんな」類を形容動詞と考えうる根拠に関しては，『例解新国語辞典（第10版）』が「「あんなに」「あんなだ」と使うことから」とするほか，高校生向けの辞書である『旺文社国語辞典（第11版）』と『学研現代新国語辞典（改訂第６版）』は，接続助詞「のに」「ので」の前で「あんなな」のように連体形活用語尾が現れることを示している。

---

[4]「あんな」類の扱いのゆれに関しては，指導参考書である森山（2021:48）にも示されている。また，この他の連体詞の変則性として，東京書籍『新しい国語１』には，指示語が助動詞や助詞に接続する「特例」への言及がある（同:264）。連体詞はもっぱら連体修飾の働きのみを持つとされ，森山（2021:80）では連体詞が「名詞だけを修飾」するため，副詞と異なり連体詞の定義に「主に」を付けていないとする。しかし実際には，助動詞「ようだ」（例：そのようだ），助詞「くらい」（例：どのくらい）に前接する例が見られる。これは，「よう」「くらい」が名詞由来であることによると考えられる（島田1964:177）。

４．おわりに

本稿では，筆者が作成・公開した「連体詞リスト」の背景ならびに内容について解説したうえで，現行の中学校国語教科書における連体詞の扱いとの比較も行った。

人の判断を経ている以上，品詞分類に絶対的な正解はない。特に連体詞に関してはグレーゾーンが大きく，（研究者にとっては興味深いのであるが，）学習者に混乱を招きうる点も少なくない。「連体詞リスト」および本稿が，連体詞を理解するための一助となれば幸いである。

【調査資料】

・連体詞に関わる先行調査

甲斐睦朗（1980）「連体詞とその語彙」『国語教育研究』26上，pp.452-464，広島大学教育学部光葉会.

鈴木一彦（1973）「近代文法書および辞書の連体詞一覧」『品詞別日本文法講座５　連体詞・副詞』（鈴木一彦・林巨樹（編）），pp.170-173，明治書院.

鈴木英夫（1984）「連体詞の諸問題―研究史的視点を含む―」『研究資料日本文法４　修飾句・独立句編　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』（鈴木一彦・林巨樹（編）），pp.65-80，明治書院.

田村泰男（2008）「常用辞書における連体詞の認定について」『広島大学留学生教育』12，pp.43-50，広島大学留学生センター.

刀田絵美子（2013）「日本国語大辞典（JapanKnowledge版）所収の連体詞―語の成り立ちに注目して―」『論叢国語教育学』９，pp.23-32，広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座.

・中学校国語教科書（令和２年検定）

相澤秀夫・野矢茂樹ほか（2021）『新しい国語１～３』，東京書籍.

甲斐睦朗ほか（2021）『国語１～３』，光村図書出版.

児玉忠・植山俊宏・丹藤博文ほか（2021）『伝え合う言葉　中学国語１～３』，教育出版.

中洌正堯ほか（2021）『現代の国語１～３』，三省堂.

・学習者用国語辞典

金田一春彦・金田一秀穂（編）（2017）『学研現代新国語辞典（改訂第６版）』，学研プラス.

中道真木男（編）（2012）『ベネッセ新修国語辞典（第２版）』，ベネッセコーポレーション.

林四郎（監修）（2021）『例解新国語辞典（第10版）』，三省堂.

林史典・林義雄・金子守（編）（2020）『学研現代標準国語辞典（改訂第４版）』，学研プラス.

森山卓郎（監修）（2020）『旺文社標準国語辞典（第８版）』，旺文社.

山口明穂・和田利政・池田和臣（編）（2013）『旺文社国語辞典（第11版）』，旺文社.

【参考文献】

井手　至（1965）「連体詞」『口語文法講座６　用語解説編』（時枝誠記・遠藤嘉基（監修）），pp.283-292，明治書院.

井上誠之助（1958）「副詞と連体詞」『続日本文法講座１　文法各論編』，pp.134-155，明治書院.

岡村和江（1967）「副詞および連体詞の境界―詞・辞分類との関係」『講座日本語の文法３　品詞各論』（時枝誠記（監修）），pp.241-256，明治書院.

金　銀珠（2005）「連体詞の成立―形容詞，adjectiveとの交渉―」『名古屋大学国語国文学』96，pp.68-53，名古屋大学国語国文学会.

小松寿雄（1973）「「連体詞」の成立と展開―研究史・学説史の展望―」『品詞別日本文法講座５　連体詞・副詞』（鈴木一彦・林巨樹（編）），pp.51-69，明治書院.

島田勇雄（1964）「連体詞」『講座現代語６　口語文法の問題点』（時枝誠記・遠藤嘉基（監修）），pp.168-178，明治書院.

刀田絵美子（2016）「連体詞の諸問題」『品詞別学校文法講座４　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』（中山緑朗・飯田晴巳（監修）），pp.171-192，明治書院.

松原幸子（2009）「日本語の連体詞は少ないか」『国文学解釈と鑑賞』74⑺，pp.113-123，ぎょうせい.

森山卓郎（監修）（2021）『中学校国語指導に役立つ文法のポイント』，光村図書出版.

【付記】

「連体詞リスト」およびその添付文書は，JSPS科研費15H03216（基盤研究（Ｂ）「日本語教育用テキスト解析ツールの開発と学習者向け誤用チェッカーへの展開」，2015-2019年度，研究代表者：山本和英）の助成を受けて作成された。

（もぎ　としのぶ／熊本大学大学院人文社会科学研究部）